

## 滋賀県立近代美術館協議会（第49回）概要

1 開催日時：令和3年3月1日(月) 午前10時～午前11時30分

2 開催場所：滋賀県立近代美術館 ワークショップルーム（2階）

### 3 出席者：

滋賀県立近代美術館協議会委員 13名中9名出席

上野委員、上田委員、神田委員、木ノ下委員、佐野委員、島委員、  
千速委員、十倉委員、山田委員（50音順）

事務局

保坂ディレクター（館長）、木村副館長、池上学芸課長、棚橋美の滋賀企画室長、  
（他、近代美術館学芸員等 5名）

### 4 会議次第

(1) あいさつ 近代美術館 保坂ディレクター（館長）

(2) 議題

- ① 令和2年度事業実施状況について
- ② 令和3年度事業計画について

### 4 概要

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>① 令和2年度事業実施状況について</li><li>② 令和3年度事業計画について</li></ol> |
|---|

#### 【主な意見等】

(委員) 4の「美術館地域連携プログラム」実施状況について、かなりたくさんの方所で開催されているが、これは休館特需的な感じなのか、今後はどういうふうにやっていくのか。

(事務局) この地域連携プログラムは休館中に特に力を入れてやっていたプログラムであり、館が開くと、館の中で行う事業が増えてくるので、これまでのような回数を外へ出ていくのは難しいと思うが、これまで近代美術館にあまり馴染みのなかった地域の皆さんとか、施設の皆さんとも繋がりが出来たということもあるので、是非この取り組みは一定程度、絞り込みつつも展開をしていきたい。

(委員) こういう事業をこれから学芸員さんがやっていく訳にいかないのでは、もっと地域の他の人達、例えば私達、美術協会の会員とか、そういうものを使っていただきたいという意見を他の会議、美の滋賀発信方策検討懇話会で申し上げていて、そこではプラットフォームを立ち上げるという話が最終的に固まった。先ほど説明のあった県立美術館に出来る教育コミュニケーション室がそれを具体化されたものなのか、または違うものなのかが分からなかった。

(事務局) 美の滋賀の懇話会で資料として書かせていただいたプラットフォーム、それを体現する組織が文化芸術振興課の美の魅力発信推進室ということになる。美術館の教育コミュニケーション室と、実質的には相乗りと言うかメンバーも重なりながらということを考えているが、何らかの事業を展開する上でも、これまでだったら美術館が単独でやっていたものを、より積極的に地域の施設、あるいは団体の皆さんと関わっていただきながら、その力をいただきながら展開をしていこうということになるので、こういった組織がそのための窓口であったり、調整をしていくというような役割を果たしていくということを今考えている。

(委員) 資料の「教育・コミュニケーション事業の展開」を見ても、その部分が分かりにくいので、ご検討願いたい。

(事務局) 捕捉すると、今、令和3年度で既に計画している中で確実性の高いものを書かせていただいております、まだ検討中のところもあるが、今、指摘のあった地域との連携のところ、理想的には、当館の学芸員が行かない形でも美術教育プログラムが、滋賀県内のエリアで実施されるようにはしたいと考えている。それは滋賀県特有の、湖北の方には中々行きづらいというのも考えれば、湖北の方に別の母体があって、そこの人達にさせていただく。そのためには、別母体の方々に県の美術館の看板を背負ってと言うか、プログラムのもとに行っていただくという形をとらなければいけないので、少し研修が必要となる。そうした事も含めて、来年度から出来るかどうかということも含めて検討していくことになるので、ちょっとここには盛り込んでいないが、そうした事が課題としてあるということは認識している。そして、コロナ禍の状況のなかで人の移動を制限しているが、一方で美術館としては公的機関として求められる入場者数の増加というものがあって、それは相反する。なので、考え方を変えて、美術館になんらかの形で、美術館、この場合は美術館の場所というよりは、美術館の活動に何らかの形で触れていただく、そういう数を増やしていくことを目的とすれば、先程の出前プログラム、出前授業等のユーザーも含めて、来館者数ではないが、美術館の活動に触れた人というような形でカウントさせていただくのが、今後のあり方かなと思っているし、外での活動の数も増やしていきたいという思いがある。その必要性とか、有効性だとかは休館中の活動の中で体験出来たことなので、是非、展開していきたいと考えている。

(委員) 資料1の「7 パートナーシップの構築」の「③企業との連携の充実」について、企業と連携とある。どこでもやっているが、滋賀県でも「文化経済フォーラム滋賀」というのがあって、これは任意団体だが10年になる。これは私もちょっと関わったことがあり、作家さんがパトロンを欲しいと、そういう出会いの場を作りたいと活動してきているが、10年経って法人会員が減ってきている。要するにあまり企業にとってメリットがない。会費を払って何もなくてもと言うか。何とか引き留めて残ってもらおうようにしているが、減ってきている。そういう課題がいっぱいあるが、多分、企業さんに何のメリットもなければ付き合いはないだろうと思う。その辺りをどう考えているのかなというのがある。特に滋賀県というか、滋賀県に限らずビジネスをやっている人達はお金出すことを非常にシビアに考えておられるので、その辺りの戦略等を持っているのか、学芸員は、その部分は不得意だと思うが、考えをお聞きしたい。

(事務局) 中々、現実的には難しいところもあるが、一つには、美術館を支援していただくことによって、企業としてのメリットが極力見える形、それは、美術館の教育活動もそうであるし、あるいはSDGsの話もあったが、企業に支援いただくことで、美術館としてこういうような社会的な役割を果たすことが出来るということを明示しながら、それに対してのご

支援をいただけるように呼びかけていきたい。あとは、社員に対して美術館の学芸員が講座をするというようなこともメリットとして提供できればということも考えている。

(事務局) その文化経済フォーラムについては先日、幹事会に出席させていただいて、企業と美術館の関係についてどういう方向があるのかというのを国内に限らず国内外の事例を報告させていただいた。こういうことがあり得るので、もし良かったら知り合いの企業を含めてご紹介くださいということをお願いした。それが実ってかどうか分からないが、今度、大津のロータリークラブの方にお招きいただいたので、そこでもおそらく似たような話をしていく。あと別途、その話をしていたところ県知事から何々さんに会いに行くといいとおっしゃっていただいて、そうした企業の方にも、すでに会いに行っていて、ただ、いきなり「お金をください」というのも難しいので、まずは、美術館の自己紹介等をしているが、何かこちらが具体的な目的を持っていないと先方もサポートしづらいだろうということで、私の方から提案したいのが、資料に書いてある無料観覧日の実施サポートということになる。これについては既に国内でも岐阜県の恵那で地元の企業がスポンサーとして、恵那の市立の美術館に月一回の無料観覧日が出来ているとか、兵庫県美も、これは企業というより財団だが、伊藤ハムの文化財団が、月一回の無料観覧日をサポートしている。こうした事例があるので、是非、滋賀県でも実現していきませんかということをお願いしたいと思っている。ただ色々あって、おそらく無料に出来るとしてもそれは企画展ではなくて所蔵品展のみという事になると思うが、そういう事が出来れば、公園の中にある美術館なので公園に来てくださっている家族連れの人達が無料ならば収蔵品だけでもちょっと見ようと。収蔵品の方がむしろ県内ゆかりのモノもあるので触れていただけるといいなと思っている。

(委員) 大学との連携について、国立大学だと今、キャンパスメンバーズとあって、大学側がいくらかのお金を払えば、国立美術館のコレクション展中心ではあるが、無料で観られるという形をとっているが、今後、地元の大学がまずあるとは思いますが、場合によっては京都に美術系の大学が非常に多いので、少なくとも関西圏、あるいは中部圏も含めて、そういった大学の学生達に来てもらって、何かそういう仕掛けを、これは提案でもあるし、あるいはすでにお考えかも知れないが、実は金沢でも金沢工芸美術大学が、ずっと一年生だけは無料で見られるようになっていた。それは金沢市の施策としてあったが、私が行ってしばらくして学長と相談しているうちに、金沢美術工芸大学の全学生をすべての企画展を無料でやってほしいという話が持ち上がって、これは懸案としてずっとあったが、中々決着せず、去年ようやく実現した。色々計算するのが大変だったが、美大から、同じ市の施設ではあるが、美大からお金をもらって、今は学生証にシールが貼ってあって、全員学生証を見せればフリーで入れるという形をようやく開館 14 年目でやっと実現した。それまで色々話題に上りながら出来なかったが、これば是非、今後検討していただきたい。

(委員) それに関して、京都の私学の大学だが、多分、年間のサポート料をお支払いしていると思うが、京都国立近代美術館の常設展は無料で入れて、企画展の場合はディスカウントで学割分の額にされているし、細見美術館の場合はいつでも無料で入れるようなサポート制度がある。

(議長) 細見美術館は、大学からまとめて協賛金を提供して払うのか？

(委員) そうです。大学が連合に加盟すると学生や関係者が恩恵を受けられる。それで、滋賀県という立地をどう考えるかだが、京都の大学まで広げられるかどうか。そうすると結構な

数の大学が入ってくる。

(委員) あと一般の大学で芸術系の学科会員とか学部会員というのもありうる。美学美術史等を勉強している学生達が、頻繁に勉強したいといった場合にそういうことが出来る。まだ制度設計だけだが。

(事務局) そのシールを貼った理由は？

(委員) できるだけ手間をかけないようにした。新しいカードを発行するとお金がかかる。だから、できるだけ既存のものを活用した。シール代だと非常に安い。ただ、そのシールを貼っている間、例えば年度によってシールの色を変えるとかすることによって、あとで勝手に使われないようにする対応は必要となる。手間をかけるとお金がかかるので、やり方はそれぞれ工夫しないといけない。

(事務局) 大学との連携ということで言うと、キャンパスメンバーズとは話が異なるが、一つはオープニングの展覧会で、成安造形大学の学生の皆さんに関わってもらい、地域に展開してきたアートスポットプロジェクトの集大成として美術館に持ってきて展示するという形になる。実際に美術館が休館中に開催し展開してきた地域のリサーチを学生の皆さんにやってもらい、その成果を美術館の中に新しく出来るラボで、小さなスペースだが、そこで展示室内には収まりきらないようなものを展示したり紹介したりできるようになるので、そちらを活用して、学生の皆さんの主催した展示をしてもらおうと思っている。あと、キャンパスメンバーズに関しては、今、再開館のタイミングではそこまで詰め切れていないが、是非、実現していきたい。県内の大学は勿論だが、実際、この美術館は立地上も京都、大阪から来ていただくことが多い場所なので、よその府県の大学も関わっていただけるような形を実現していければと思っている。

(委員) 前から考えていたことだが、美術館の隣に龍谷大学がすぐある。前の道をまっすぐ東に行くと滋賀医大、それから立命館大びわこキャンパスがありご近所さんである。だが、お付き合いは、あまりないのではないかと。文化ゾーンというが、それぞれ孤立しているように見える。何らの関係ができないか。実は、京大の桂キャンパスは工学部の大学院だが、国道9号線を挟んで向こう側に京都市立芸大がある。尾池和夫さんが総長の時に、工学とアートを融合した企画で年に一回秋、展示をやっていた。京大のキャンパスに京芸の作品を置いていたりしていた。そういう発想もあるのではないかと。立命は理工だが、デジタルもやっていると思うし、龍谷も何かあるんじゃないか。それから滋賀医大、これはちょっと違うかもしれないが、それらの出会いで何か生まれるということ考えられないか。今直ちに何かすることではないが、視野に入れておいてもらってもいいのではないかと。

(事務局) 県庁メールというのがありますが、先日、この文化ゾーンの中でも大学との連携をどうにかしていこうという議題みたいなものが立ち上がっていて、そこで県が大学にヒアリングした結果というのが見られたので、例えば、県の医大が健康をテーマにした講座を開催したいが大学の中に適当な場所がないので場所を探しているというのがあったので、それでしたら美術館としては講堂があるので、講堂を使ってはどうかと提案しようという動きになっている。県の施策として「健康しが」というのがあり、美術館に来ていただく目的というのは皆さんそれぞれあるが、よく言われることだが心の健康みたいなものも当然あるし、アールブリュットというのは常に様々な福祉とか障害等とも関わってくる隣接分野なので、そうい

う意味でも当館が医大と連携していくことは非常に意味があるだろうと思う。そして、龍谷大の方は農学部があるが、僕は美術館の前で野菜を売りたいと言って皆を困らせている。県産の野菜を売ったらいいのではなかろうかと。公園に来る人に、ここまで来てもらう時に、美術館ありますと言っても来てくれないのであれば、野菜を買えると言った方がいいのではないか。そんなことばかり考えているが、そうしたことを含めて、農学部と参画出来るだろうし、また、先方の要望として既に公園の中にビオトープはあるが、それ以外にもビオトープを作りたいという声があるので、それが美術館の敷地内で、より自由にできそうであれば、連携で何かやってくれるんじゃないかということで、先方の要望をみながら連携をしていきたいと思っている。

(議長) 龍谷大学の中に放送大学の滋賀のセンターがあるので、学習意欲が非常に高い社会人の方々の拠点にもなっているので、是非それも視野に入れていただきたい。

(委員) 地域との連携ということから言わせていただく。資料1の11ページを見ると、早速6月から3月までの展覧会の開催予定が載っていてすごいなと思っているが、12月のところに滋賀県の美術展覧会というのが入っていて、大人の作家さんの作品が予定されているが、出来たら滋賀県の子供達の作品展もさせてほしい。今現在もやっていて、以前は近代美術館でさせてもらっていたが、休館中、栗東の方に会場が変わったり、西武百貨店があった時には上のギャラリーみたいなところを借りていたりしていたので、出来たらそれをまた近代美術館の方でお願い出来たらと思っている。金曜日にもその会議があったが、まだ6月開館してすぐは難しいということで、一年ぐらいは様子を見てからという話があったが、また、次の年からでも、子供達の作品展の会場を提供いただけたらと思う。ちなみに対象の子供達は、幼稚園、こども園、保育園、4歳の子供達から中3まで。一部、高校の作品が入る場合もあるが、幅広い年代まで、200～250点くらい集まる作品展をいつもしているのだから、ギャラリーの方を借りて作品展をさせていただきたい。その期間中に展示をすると、やっぱり子供達が見に来てくれるだけでなく、子どもが来ると、保護者とかお爺ちゃんお婆ちゃんとか三代ぐらいに渡って来てもらえるということと、あと、教員向けの研修会をいつもしていて、県内の教員、幼稚園、保育園、小学校が中心になるが、先輩教員が説明をする。作品の見方みたいな説明をする講師がいて、それを皆、若手の先生達がそれをメモしながら、研修する機会もあるので、また是非それを入れてほしい。ちなみに毎年、審査会が12月の終わり頃にあるので、それ以降がありがたい。こうやって企画展もあるので、私たち学校現場のことも考えると、夏休み頃、以前も夏休みをお願いしていたが、夏頃に入れてもらえるとうれしい。夏だとちょうど子供達も来やすい時期だと思う。夏休みに親子で来て、新しい美術館を見てまわったり、図書館に行ったり、近くの広場で遊んだり子供達は楽しみにしていると思う。

(委員) 今日は新しいミッションステートメントを聞かせてもらい、その上で展覧会のスケジュール等を聞くと、すごく面白そうでワクワクした。あと個人的に滋賀県展が復活するのがすごく嬉しい。私も高校の時にこの出展に向けて頑張って制作していた。これが休みの間、高校生は何を目指して頑張っていたのかなと思った。楽しみだ。

(委員) 新館長の就任に期待を寄せており、ステートメントによって分かりやすいメッセージを受け止めている。今後の課題はいくつかあると思われるが、何よりもやはり新生美術館が変わったという印象・イメージをどういうふうに発信していくか、とても強いメッセージを発信しなくちゃいけないということ。また、複数の企画展や事業数をやっておられるが、ミ

ッションに応じた対応の全部をすべて出来るわけではないので、やはり美術館は存在し続けるので、全部に力を入れるよりも段階的、中心的に何をしていくかということを見据えて実施してはどうか。多方面からのご意見やご要望については、マンパワーも、予算も限られているので、現段階の優先順位をつけ、何を実施していくべきかということを考えられてはどうか。今後は、コロナ禍でいきなり大人数が来ることも難しく、来場者数による価値基準や評価軸というの、おそらく美術館運用が変わっていく中で、コロナ以前の変わる前の仕組みであったり、休館中におけるサイトの充実とか、どのセクションを学芸で運営していくのかとか、その辺りも、新しい表現というか美術館の形として期待を寄せる。なお、今度、4/20 に保坂館長に私が大阪で運営に携わる拠点のオンラインプログラムでご一緒させていただくが、発信していくのは自館だけでなく他館とのネットワークなど、そういったものをいかに、県外を超えて連携していけるかも期待している。

(委員) 出来あがったものを持って来てもらうのではなく、出前講座みたいに現場で創造を促すような、そういうものを提供してほしいということであったと思うが、そういう意味でこの前 24 日に、美の滋賀発信補助事業があり、県から美の滋賀に関連のあるガラスアート展や、アールブリュット展、かわらミュージアムでの展覧会等、もう 10 年位やっておられる団体、BIWAKO ビエンナーレもそうだが、美の滋賀に関連するようなものをつくるということもそこでも言われていた。また、報告会の様子をご覧になっているかもしれないが、今コロナでもあるし、プラットフォームというのは拠点としては、分けて集めて仕舞うみたいな集合というコールだけじゃなくて、混ぜて散らして繋ぐといつも言っているが、コールして呼び覚ます、地域の力を呼び覚ます、そういう意味のコールもあるかなと思って期待している。それから、発信力強化ということで、これは少し意地悪な皮肉な感じかもしれないが、今朝来た時、美術館内の通信状況でスマホが繋がらなかった。例えばこれからスマホで来館者が参加するとか、見て撮ってパッと発信することが、すごい発信力のひとつの力になると思う。その辺、改善されていくんだろうとは思いますが、そういう方向でも非常に重要だと思うので、是非、快適な、オンラインも含めて出来ると思う。企業との連携について言うと、SDGs って賛否両論あって、中々入れるのが気恥ずかしいとか、もうやっているとか。やっぱり企業との連携でやっていくには、これを使うのがひとつの手だと思う。あと、ワーケーションとか ZOOM の背景、こんなのがあったらいいと思うのは、やっぱり ZOOM の背景を提供できます等。作品は難しいかもしれないが、そういう連携の仕方もあると思う。あと、大学については、滋賀県 14 大学コンソーシアムで各大学が持ち回りで事務局をやっているの、ひとまずその辺りでやってもらい、紹介してもらうとか、連携相談してもらうのが、全部の大学が関わっているの、いいかなと思う。大学地域連携課題解決事業というのをやっていて、地域とか行政から持ち込まれる課題に対して学生がフィールドワークを通じて関わっていくという授業内容でやっている仕組みもある。そこに課題を持ち込んでもらおうと、授業を通じてするというのも出来ると思うので、そういうところ活用していただいたらいいと思う。

(委員) 三つお願いというか希望。一つは、リニューアルされて再開館されるが、先程の説明でも、スペースは広がらないということだったが、将来的なことだが、やっぱり何らかの方法でスペースは広げて行ってほしいし、この前、展示室も拝見し、天井も床もきれいになって良かったが、展示ケースのガラスは前のままというのはガッカリしたし、その辺りは予算的な縛りがあるので大変なのも分かっているし、本当は美術館としてはガラスも新しいものに変えたいと思っていても予算がつかないというのが現状だと思うが、諦めずにやっぱり、より良い美術館にしてもらいたいと思っている。

二点目は、今後の展覧会の予定を見るとやっぱりギチギチに入っている。皆さん頑張ってくださいと思っているが、限られた学芸員さんの数で、これがずっと続くのか、しんどいだろうなと思っている。これは前から申し上げているが希望。企画展示室をもうちょっと運用を弾力的にしてももらえないかなと思っている。残念ながらギャラリーのスペースは非常に狭い。実は県内には規模の大きい展覧会もやっている。それはギャラリーのスペースでは出来ない展覧会というのは、もう何十年、継続しているものがいくつもある。そういうものを隙間に企画展示室を使わせていただくと、学芸員さんにとって、その間が準備期間でとれると思うので、お互いにウィンウィンの関係になるんじゃないかと思っている。県美展もあるし、私は美術協会の立場で来ているが、元々は書道協会の立場です。書の方は、子供対象ということになると青少年書展というのを1月に毎年やっている。それをずっと西武でやっていたが、なくなって、今年は草津のイオンモールでやったが、だいぶ規模が小さくなった。それでもやっぱり、来場者は3日間で9千人くらい入っている。当然、子供とその家族が来るので、こういうものを美術館でさせていただくと、自然に、今まで来なかった子供達が美術館に来ることになるので、そういうものをうまく使っていただきたいと思っている。

三つめは、先程、保坂ディレクターが、これからのコレクションの中で、アジアのアートとかおっしゃっていたので、それならという気持ちもあって申し上げるが、中々、美術館で書を収蔵してもらうのは難しいということは重々承知しているが、是非、今後、ご検討いただきたい。と言うのは、滋賀県は近現代の書というところを見ていくと非常に重要なポジション占めている。近代の明治以降になると、ご存知のように日下部鳴鶴、巖谷一六という明治の三筆のうちの2人が滋賀県出身である。これが今は鳴鶴が彦根、一六は水口、それぞれで一応作品は収蔵されてコレクションとしてあるが、それぞれである。だから、水口の一六、彦根の鳴鶴で終わっていて、滋賀の鳴鶴・一六にはなっていない。で、そこで終わってなく、今、滋賀は書が盛んだというので、美の滋賀マップでも取り上げていただいているが、なぜかという、戦後の今の現代書道に繋がる動き、その中で重要なポジションを占めているのに森田子龍という人がいる。井上有一と並ぶ方だが、この方は兵庫出身で、晩年、大津の堅田におられた。その関係で森田子龍の影響を受けた人が滋賀にいた。その流れが今に繋がっている。現在もいる。これは現役の作家だが、例えば、太田左卿という人がいる。この方は滋賀県ゆかりの芸術分野で小倉遊亀以来、2人目の叙勲を受けた人だが、そういう人達、近現代の書というのが一つの流れで、滋賀で、全部見渡せるようになるので、何かコレクションをしていただくと、一つのいいコレクションになるのではないかと思っている。専門の学芸員がいないとか、理由は分かるが、先程申しあげた森田子龍の作品は国立国際美術館に収蔵されているということもあるので、是非これからご検討いただきたいと思う。なぜこれを一生懸命言うかという、鳴鶴・一六は大丈夫だが、森田子龍になると散逸してきている。一番コレクションされていた所にも無いというのが、最近分かった。流出してしまった。急がないと中々コレクションが難しくなると感じている。

(議長) 「かわるかかわる」ということで、やっていく訳だが、そうなった時に今までの美術館は入館者数がひとつの指標としてあって、入館者が多ければ良いみたいな数字のやり取りがあったが、関わり方が入館者の数に限定されないで、新しい指標をこれから提案していくというのも必要ではないかと思う。それから「かかわる」で、先程、館内のWi-Fiが弱いという意見があったが、実は大学もそうだが、今、ネットワークを使った作業が増えていて、これから美術館でも「かかわる」というテーマでワークショップをやる際に、館内に集まっている人達と館外にいる人達がネットワークで繋がって何らかのワークショップをやる時に出来ない。回線が細いとしんどいと思う。だから、大学の方でも今オンライン授業を今年一年間やって、これは大変だと、随分テコ入れをした。

(委員) 県立大学でも学生からも署名運動があった。だから、近代美術館のためにも学生に署名をしてもらおうかなと。

(議長) Wi-Fi 環境というのが、実はアートの中でも非常に今、重要になってきているので、そこは少し力を入れたらいいかなと思う。それからもう一つ、「かかわる」といった時に国内外との関わりを考えた際に、やはりウェブサイトが出来れば4カ国語対応くらいにした方がいいのではないかな。ぜひお願いしたい。

(委員) 資料1の7番「パートナーシップの構築」の「企業との連携の充実」のところで、これからウェブサイトとか、デジタルの発信を、力入れていかれるということなので、例えばデジタルコンテンツの動画とかSNSの配信とかで企業さんの広告を出すとか、そういうこととかそういうことは考えられたりされないのか。企業のサポーターになる時のメリットとして、すごく分かりやすいと思うが。

(事務局) 動画の中に広告を入れるということでしょうか。

(委員) はい。任意の企業さんの広告を出せるのか、その仕組みがあまり分かってないが、企業さんの動画をプロモーションで作るとか何かそういうことを一緒に動画で流すとか、そういうことが出来るといいかなと。

(事務局) 通信環境の方、先程からご意見いただいておりますけど、確かに今、現状この携帯電話の電波の入りが悪い。周辺はまだいいが、美術館だけが悪い。今、携帯会社とも交渉していて、一部の会社は館の中にアンテナを作ってくれるということを言ってくれている。あと、Wi-Fiについてもお客さんが使われるところ中心に開館までに整備していきたい。

(事務局) 今おっしゃられた動画の広告については正直そこまで考えていなかったが、先程、意見があったと思うが、メリットか何かがないと企業は動いてくれないので、ポイントを絞って教育系のプログラムの動画作りたいのをお願いします、と多分そういうふうに絞ってやっていくことになると思う。その場合、県内企業で教育関係のところと、ある意味タイアップを組むとかそういうことは考えられるかと思う。

(委員) オンラインの可能性は非常にあると思っている。コロナ以降の色んなことを考えると、私も実は金沢で2年間程、9回くらいしかやっていないが、去年からオンラインで3回やって、一番最後のものがオンラインと併用で40人だけ入れるという形でお客さん半分にしてやった。ある回は、トータルで600人の人が聞いてくれたりした。出入りもあったが。保坂さんは前から知っているが、全国の美術館職員のなかでもベスト3というか、非常に発信力がある方で、保坂さん自身がメディアになっていると思うので、例えば、毎日夕方4時から5時は、保坂さんが喋ってくれるとか、あるいは別に特別なゲストじゃなくてもよくて、学芸員でもいいし、誰かゲストがいて、ただならぬ1時間喋ってくれて、それをいつでも見られる。それが絶えずアーカイブ化されて、今、滋賀ではこんなことやっているんだみたいな。それが、保坂さんが中心になって動くだけでも、僕はかなりの波及力があると思う。若い人は、みんなツイートしてくれるので保坂さんがこんなこと言っていた、こんなこと言っていたのかな、とか絶対あると思う。ディレクターなのにこんなこと言っていたのかな、とか。それくらいのある種挑発的な感じも出しつつ、この美術館をこれから支えていく。是非、期



待したいと思う。

(議長) そろそろ時間なので、他にご質問・ご意見が無いようであれば、本日の協議会を終了いたします。皆さん、お疲れ様でした。